基肄城築造1350年

基肄城を知る⑧

―荒穂の神さまと基山―

荒穂神社は、宮浦4区にある古いお宮です。

基山町役場前の道を西に進み、通称5号線のガード下を潜り、そのまま道なりに上って行くと、右手に大きな鳥居が見え、その奥に基山を背景に社殿が建っています。

縁起によると、創建は645～654年の孝徳天皇の頃で、基肄国造（※1）物部金連の子孫の金村臣（※2）による、とされています。645年と言えば、大化の改新で馴染みのある年号ですから、なんとなくその古さが実感できるのではないでしょうか。祭神は瓊瓊杵尊、他6社（現在は五十猛命も加えて7社）ですが、最初は基山山頂に社殿があり、山頂にあるタマタマ石を磐座とする自然神を祀ってあったと考えられます。荒ぶる自然神が農耕に恵みを与え豊穣をもたらすことから、荒穂と言う名前が付いたのかもしれません。現在地に移ったのが、今から330年ほど前の江戸時代、五代将軍綱吉の時代の貞享2年（1685年）。度々の戦火で転々として、この地に落ち着きました。

県道の脇に建立された一番手前の鳥居の前に立ち、社殿後ろの基山山頂をご覧ください。その先にはタマタマ石と天智天皇欽仰之碑がそびえています。立地場所にも特別な配慮がなされた事がわかります。

荒穂神社にまつわる昔話が幾つか残っています。

そのなかから『神馬』の話を紹介しましょう。

木の尊がお住まいになっている木の山は、叔父神五十猛命が根の国から八十の木の種を持って来られて、日本で一番最初にその種をお播きになった山であると伝えられています。

木の尊は人々をお慈しみになり農業を教えられたばかりでなく、悪魔が人々を苦しめないように沢山の神様をお連れになって国々をおまわりになりました。

ある日、木の尊が八百万の神々と一緒に木の山の頂上から広々たる野や山を眺めておられた時に、

「農業は進み人々は豊かに暮らしています。」

と神々が言いますと、木の尊は

「足下の村にも悪魔が出て人々を苦しめるかもしれないぞ。」

と申されました。そうすると、木の尊のお馬が急にたてがみを逆立て、獅子の如く荒れ狂い、木の尊を乗せたまま一声高く「ヒヒーン」と嘶くや否や、そこら中を駆け巡り、蹄の音も高く何千尺かと思われる谷底まで、一とびにとび下りました。その蹄の跡が今も荒穂の宮の前の石の上に残っていて、「オコシヤスメ」とよんでいます。

（『基山郷土読本』より）

現在この石は、拝殿の東側にあり、横には、木の尊と力比べをした高良の神様が、久留米の高良大社から投げた大きな石も並んでいます。その石には、なんと、高良の神様の指痕が残っています！蹄の跡と併せてご覧いただき、神様のお姿を思い浮かべてみるのも楽しいかもしれません。

※1 国造…大和朝廷の地方官

※2「連」・「臣」…日本古代の姓のひとつ。

※問合せ先　教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92―2200

一番手前の鳥居から見た荒穂神社
（奥にみえる山の平らな部分
左端あたりが基山山頂）

タマタマ石（左）と
天智天皇欽仰之碑（右）